平成27年度（第25回）通常総会 特別講演

日時：平成27年5月28日
場所：札幌市　北農ビル19階
共催：学校法人酪農学園

挨　拶

一般社団法人北海道地域農業研究所
理事長　内　田　和　幸

本日の特別講演会は、北海道地域農業研究所の主催、学校法人酪農学園の共催により開催させて頂きました。両団体を代表しまして一言ご挨拶をさせていただきます。

お集まりの皆様方には、時節柄何かとお忙しい中、また総会に引き続き講演会にご出席いただき、厚くお礼を申し上げます。今年度は例年になく暖かい春で、農作業も順調に進み、この数年の内では幸先の良いスタートとなっております。このスタートダッシュを生かし、今後の良好な生育を期待するところであります。

さて、先ほど当研究所の二五回目の通常総会を終了しました。昨年度はJAの農業振興計画の策定支援の共同研究、各連合会・行政・関係団体からの委託研究をはじめ、自主研究としての調査研究事業、並びに各種講演会の開催や講師派遣、出版助成等に取り組みました。その内容につきましては、年報で皆様方にも周知をさせていただいております。今後とも農業情勢に的確に対応した、タイムリーな調査研究に取り組み、会員並びに関係機関の期待に応える事業を推進してまいりますので、引き続きご指導とご支援のほどをお願い申し上げる次第でございます。

さて、本日の特別講演会には講師として酪農学園の仙北学園長をお招きしました。仙北学園長のご経歴はお手元の資料の通りでありますが、地域農林行政に多大な成果・実績を積み上げられ、現在は酪農学園の学園長として後進の育成に努められて

おります。本日は黒澤酉蔵翁の生誕一三〇年に際し『〝健土と健民〟に虹を架けた農思想』と題して、仙北学園長がお書きになられたお手元の書籍から、黒澤酉蔵翁の精神や教えについて、貴重なお話を頂けるものと期待をしております。また、ご講演に引き続き、当研究所の顧問であります太田原先生からもお話を頂く事としております。大変お忙しい中ご講演頂く仙北学園長並びに太田原先生には、あらためてお礼を申し上げます。ありがとうございます。内外圧により混迷する現在の日本農業の再興や発展に向けて、この講演会で得られるものが、ご参加いただいた皆さま方に稔りあるものとなることを期待し、開会にあたっての挨拶とさせていただきます。よろしくお願い致します。

講演

黒澤酉蔵翁―生誕一三〇年・遺訓を聴く
『〝健土と健民〟に虹を架けた農思想』

学校法人酪農学園　学園長　仙　北　富　志　和

みなさんこんにちは。久しぶりに人前に出ましたので、うまく話が出来るかどうか自信はありませんが、頑張りますのでよろしくお願い致します。

今日はこのような立派な席を設けていただきまして誠にありがとうございます。私は、例の福島の原発事故を境にして、国土の尊厳といいますか国土の汚染ということが非常に問題に

仙　北　富志和（せんぼく　としかず）氏

【略　歴】

1941年7月　北海道増毛町　生まれ
1964年3月　酪農学園大学酪農学部卒業
　　4月　青森県に奉職、農業指導課長・農政課長など歴任
2001年4月　青森県農林部長を辞して酪農学園大学に転職・環境システム学部教授　農学博士
2007年7月　学校法人酪農学園　常務理事兼任
2013年2月　財団法人酪農育英会　理事長
　　6月　学校法人酪農学園　学園長

※中央管理的な一律農政から地域の特性と自主性を活かした「地域選択型」農政への転換を主張

【主な著書】

『地域農政の展開手法』　2002年
『「健土健民」への招待』　2005年
『生き方を左右する～感化力と教育力』　2006年
『原始林は「拓かれて」残された。』　2007年
『北辺の野に祈る～北海道開拓とキリスト者たち～』　2008年　など

なって、一般の国民も福島或いは宮城県の国土汚染、農地汚染というものが、これでいいのかということに非常に高い関心を持ち始めて、去年のちょうど今頃、私どもの酪農学園の建学の精神の一つであります「健土健民」、黒澤酉蔵翁が八〇年前に唱えたこの哲学を、もう一度整理してみようと思いたちました。今年は黒澤酉蔵翁の生誕一三〇年だということにも気が付きまして、これは丁度よいタイミングでした。そして皆さん方のお手元にお配りした本が出来上がる時に、国連の国際土壌年が今年であることもわかり、さらにタイミングが良くなりました。黒澤酉蔵翁が「何かやれ、しっかりせい」ということを天国から言われたのかなという気がしております。黒澤酉蔵翁の誕生日が三月二八日であり、それに間に合わせて出版いたしました。

古い講演録などはいろいろなところに散らばっておりましたので、それを整理して、皆さま方の目にもう一度触れてもらってはどうかと思ったのが動機でございます。そういう動機と、当学園の麻田理事長から是非にと言われまして、地域農研さんのお力を借りたということです。ありがとうございました。

さてそこで、黒澤酉蔵翁の想いや信念というものを、皆様方にどう伝えたらいいのかをかなり悩みました。どのような言い方をすればいいのか考えましたが、私なりに整理をした順番で今日はお役目を果たしたいと思っております。

最初に黒澤酉蔵翁とはどういう人か、名前は知ってはいるけれども殆んど知らないという方々もたくさんおられると思います。黒澤酉蔵翁の足跡を簡単にご紹介したいと思います。

まず、年表に黒澤酉蔵翁の足跡の概要をまとめています。

黒澤酉蔵翁は明治一八年に茨城県の現在の常陸太田市でお生まれになっています。生い立ちからしますと、比較的裕福な農家であったようですが、父親が酒を飲み過ぎて財を無くしたことから、勉強したいけれどなかなか出来なかったわけです。母親の理解了承を得まして、東京に出て勉学をすることが出来ました。時あたかも明治三四年、田中正造の明治天皇への直訴事件が起こっています。直訴事件そのものは明治天皇が知らない間に馬車は通過してしまったのですが、新聞が大々的に取り上げた。それを知った黒澤青年が、五、六日後に、宿屋に泊っている田中正造を訪ねてその顛末を聞いた。そして内村鑑三を団長とした足尾銅山の視察団（約一、〇〇〇名）が出来るということで、田中正造が黒澤青年に「それについて行って、現場を見たらどうですか」という話をされた。そこで、黒澤酉蔵翁は友達と共に一週間に渡って現地をつぶさに見た。それでこれは大変なことだとの思いに到り、学業どころじゃないと勉学を投げ捨てて田中正造の鞄を持った。「小田中」と言われるほど果敢な行動に移って、牢屋に六ヵ月間入るという経験もしました。

その後、田中正造の勧めによって復学し無事中学を卒業しますが、ちょうどこれから人生をどうしようかと思っている時に、母親が亡くなってしまうわけです。社会運動も良いけれど、自分の身内の面倒、弟や妹の面倒も見られないのは、社会運動としてはいかがなものかとの疑問にかられ、先生の言い方を借りますと、アメリカに行くか北海道に行くか迷ったが、お金もないので北海

〈付〉黒澤酉蔵翁の主な足跡

年　次	事　柄
＜出生から渡道＞	
1885（明治18）	茨城県世矢村生まれ（現常陸太田市）
1900（ 同 33）	東京の神田数学院・正則英語学校で苦学
1901（ 同 34）	田中正造の明治天皇への直訴後、足尾鉱毒被害民救済運動に挺身
1905（ 同 38）	母の死を機に渡道を決意、宇都宮牧場の牧夫見習い
1909（ 同 42）	キリスト教の洗礼、酪農家として独立
1982（昭和57）	２月７日永眠
＜教育活動＞	
1933（昭和８）	北海道酪農義塾創設
1942（ 同 17）	野幌機農学校設立
1948（ 同 23）	野幌高等酪農学校（通信教育）設立
	北海道酪農青年研究連盟の設立を後援（現日本酪農青年研究連盟）
1949（ 同 24）	酪農学園大学部設立
1950（ 同 25）	酪農学園短期大学設立
1954（ 同 29）	北海道農業教育振興会会長
1957（ 同 32）	（財）酪農育英会設立
1958（ 同 33）	三愛女子高等学校設立
1960（ 同 35）	酪農学園大学設立
1971（ 同 46）	「田中正造全集」の出版決意
＜産業活動＞	
1925（大正14）	全道の酪農民を対象にした北海道製酪販売組合を創立（酪連に改組）
1926（ 同 15）	農業組合中央会道支会長（現北農中央会）
1940（昭和15）	北海道興農公社社長
1950（ 同 25）	（株）雪印乳業相談役
1960（ 同 35）	北海タイムス社社長
＜政治活動＞	
1924（大正13）	道議会議員
1942（昭和17）	衆議院議員
1945（ 同 20）	日本協同党を結成、代表世話人
1946（ 同 21）	公職追放
1950（ 同 25）	公職追放解除
1951（ 同 26）	道知事選に立候補、落選（以後、直接的な政治活動を断つ）
＜北海道開発活動＞	
1923（大正12）	北海道畜牛研究会をつくりデンマーク農業を紹介
1924（ 同 13）	第２期拓殖計画を主導（牛馬100万頭計画）
1934（昭和９）	北海道農業革新期成会を結成
1945（ 同 20）	戦災者北海道集団疎開100万人案を建言
1954（ 同 29）	北海道開発審議会会長（８期16年）

黒澤酉蔵翁…生存者叙勲の受章

1964年　勲３等旭日中綬章（酪農振興に尽力　79歳）
1970年　勲２等旭日重光章（北海道開発の推進　85歳）
1981年　勲１等瑞宝章（北海道開発の父・酪農学園の創立　96歳）

道に行くことにした。こういう話を聞いたことがあります。

北海道に渡り、室蘭から札幌に出まして、北海タイムスの社長の阿部さんのところで就職をお願いした。阿部社長は、その後札幌の区長、今の市長になった人ですが、この人の紹介で、当時白石村菊水にあった宇都宮牧場が紹介され、宇都宮仙太郎という酪農の先達にめぐり会うことになります。宇都宮仙太郎が言った有名な「酪農三徳」という言葉があります。酪農には三つの良いところがある。酪農という言葉はまだ使われていませんが、「牛飼いの商売には三つのいいところがある。ひとつは役人に頭を下げなくてもよい」、憲兵にしこたま睨まれて、もう役人にはこりごりだということで、これが大変気に入ったという話を聞いたことがあります。「二つめは嘘をつかなくていい」、牛を相手に嘘をついて何になる。「三つめは牛飼いの商売は、人々を健康にする基を生産する素晴らしい仕事である」と言われて、すっかり気に入り、翌日から牧夫見習いとして住みこむことになりました。牧夫見習いといっても、乳搾り、手搾りはさせてもらえず、黒澤青年は牛舎の前の木に乳頭を真綿で作り、紐で木にぶら下げて乳搾りの練習をしたという有名な逸話が残っています。宇都宮仙太郎は、これは大変な男だと見込んだといわれています。その後、キリスト教を信仰し洗礼も受けていますが、九六歳で永眠されました。

次は教育活動ですが、日本の農業を発展させていくためには、教育をおいて他に道は無いということに思いが至り、いろいろな周りの人の反対や心配を押し切って、八二年前に今の苗穂のサッポロビールの近くに、酪農義塾を創りました、それが教育活動の始まりです。昭和の初めの世界恐慌、経済不況で農村が大変惨めな目に会っていました。政府も魂をしっかり持った農民を教育するということで、地域や県によってまちまちですが、農民道場や修練農場、北海道は拓殖農場など、そういうものを全国に創らせたわけです。

黒澤酉蔵翁は、そういう全国の国の政策の動きをも見ながら、国の制約なり、何なりは一切受けない、自分独自の教育理念に基づいて酪農民の教育にあたるということで塾を創ったのが、今日の酪農学園の基であります。

その後、現在の文京台の地区に移転するわけですが、授業料は取らない、全寮制で食費も取らず、組合のお金を少し頂きながら、働いて自前で生活・自立できる農民を創り上げるということで、戦争が終わってしばらくまで授業料も食費も取らない学校でした。しかし、貯めていたお金がインフレでパーになってしまいましたので、やむを得ず食費を取る。その後授業料も取ることになったようでございます。

デンマークの復興が、農民教育、農村青年教育、酪農青年の

教育によって復興したのだという強い思いがありましたので、デンマークを見習った教育を創りたいというのが、黒澤酉蔵翁の教育に取り組んだ動機であります。

産業活動につきましては、酪農は牛一頭から自立していきますが、規模はだんだん拡大して行きます。

大正十二年に関東大震災が起きます。大規模な地震で四〇万戸が火事で燃えてしまい、一〇万人以上の死者・行方不明者を出したという、大惨事でありました。世界中から救援物資が日本に送られ、その中に大量の乳製品が入っていました。国も食糧不足を心配しまして、輸入食品を一時、関税撤廃したために、国内の乳業メーカーが国内の牛乳を買わない、原料乳は要らないという不買問題が起こり、酪農家は毎日搾った生乳をドブに捨てる、川に捨てるということになってしまった。これは大変なことだと、黒澤酉蔵翁たちは、この苦難の出来事を逆利用して何かプラスになる方向転換が出来ないか、農民の苦しみを自らの手によって解決するのだということで、北海道製酪販売組合という組合組織を創りました。酪農家も貧乏であったため、なけなしの資金を出し、それに参加してやっと漕ぎ着けたというのが組合運動の始まりです。

しかし、酪農民単独の組合は産業組合としては認められないという、道庁の判断もあり、他の農協を巻き込んだ連合会に切り替え、「酪連」、製酪販売組合連合会に改組しました。何を目的にしたかというと、一元集荷制度であります。最近一元集荷制度から抜けるとか抜けていかないとかという問題があちこちで出てきています。酪農民個人個人がめいめいに乳業メーカーに牛乳を売って、不安定な価格、不安定な流通に陥ったらだめだということで、組合が一元管理する。そして希望する乳業メーカーに多元的に販売する。現在も生きている制度の基を創ったわけです。

酪連はその後、公社になり、そして株式会社になり、戦後、集中経済力排除法によって、分割を余儀なくされ、昭和二五年に雪印乳業が誕生する。こういう経緯を辿る中心的な役割を黒澤酉蔵翁が果たして来たということです。

政治活動ですが、これは札幌の市会議員や道議会議員を経験しながら、戦争が近づく時に大政翼賛会の北海道代表になって、国会に行くわけです。間もなく衆議院の選挙があり、ものの本によりますと、黒澤酉蔵翁は告示の前日まで推薦を断ったと書かれています。たぶん政治家になるのは、必ずしも自分の本意

衆議院農林委員会で政府に詰め寄る黒澤酉蔵翁（1944年頃）

ではなかったのだろうと思います。

血気盛りの昭和一七年ごろ、国会の農林委員会での質問を凄まじい面構えで政府とやり合っているところです。こういう写真が保存されておりました。

衆議院議員をやりながら戦争が終わるわけですが、日本協同党という党を結成します。これは戦争に敗れた日本が復興して再生するためには、デンマークの協同組合主義を参考にして、協同組合の精神を国民みんなが持って事に処さなければ、日本の復興は無いという思いで日本協同党を結成しました。ご本人は公職追放になって選挙に出られなかったのですが、北海道・長野県を中心として多くの国会議員を生んだという経緯がございます。

公職追放後、吉田茂首相の強い勧めがありまして、北海道知事選挙に出ることになります。公職追放は後に解除になりますが、自分がこれから何をやるかを考えた時に、明治の末から今までデンマークに追いつくことを提唱し、北海道を日本のデンマークにするという思いでやって来たけれども、残念ながら自分はまだ行ったことがない。ということでヨーロッパとアメリカの視察旅行に出ます。約二ヵ月間、デンマーク・ドイツ・オランダ・イギリス・アメリカを見て回っている最中に、吉田茂から早く帰って来て知事選挙に出てくれと言われて、渋々急いで帰って来たということです。年表を見ますと、告示の二週間か一〇日くらい前に帰って来たわけです。それから選挙を戦いましたが、選挙を手伝った私の親戚もいました。デンマークかぶれで行く先々でデンマークの話ばかりをするので、農村部の人はいいけれども、都市部の人にはピンとこなかったのではないかという話を聞いたことがあります。当時は労働組合の組合運動の強い時代の田中敏文知事であり、力及ばずでした。九二万票対七八万票という大接戦をしたということが記録に残されています。

その前後に、これも有名な政策ですけれど、緊急入植政策をやりました。北海道にも戦後引き揚げて来た人たちがあちこちに入植・開墾・開拓に入った。野幌にも世田谷部落というのがありますけれど、これも東京の戦災にあった人たちが来た場所です。この引き揚げ者、戦災者の緊急入植事業によって食料の増産、北海道の開発、戦争勢力の巻き返しも含めて、そういう提案をした経緯がありますけれども、これは非常に苦しい目に遭わせて申し訳なかったということになっています。

昭和二九年から一六年間にわたり、北海道開発審議会の会長をやりました。これは自ら筆を取って、政府に対する建議書を書いたという有名な話が残っています。何といっても根釧パイロット事業。或いはその後の新酪農村の建設というものに非常に力を入れました。我々が学生の頃の話ですけれども、自分は農林大臣にも推薦されたけれど、発疹チフスでやれない。また、協同党の世話人でもありますので、断った経緯があります。そういうことで、自分は農林大臣はともかくとしてひょっとしたら総理大臣になっていたかもしれない。そのまま政治を続けていれば青函トンネルくらいは少し早く出来たかもしれないけれど、しかしこれは一生の仕事ではない。だから何の悔いもないということで、それ以来政治の道には直接関与しないで教育に専念した。政治に足を突っ込み過ぎたら、酪農学園も雪印乳業もなかったかもしれない。何が幸いするか分からない。こういう話をされたのを思い出します。

一しゃ千里でしたが、黒澤酉蔵翁の人生の大部分は、北海道の寒地農業の確立、酪農によって冷害を克服するというデンマークに習う運動、それを実際に担う青年教育に全力を尽くして九六歳の人生を終えた。少し長くなりましたが、黒澤酉蔵翁という人をあまり知らない人のために若干時間を取りました。

次は黒澤酉蔵翁の農哲学というものをご紹介したいと思いま

す。

まず第一に、昭和一七年ごろの演説録ですが、『健土国策と有畜機械農業』という講演の冊子が出て来ましたので、これを整理しました。国家の興隆、国が栄えて行くとはどういうことなのかを論じております。日本国の永遠不朽の繁栄はいったい何によってもたらされるか。これは民族の持っている思想と民族の持っている国土が立派であれば、永久に日本の国は栄える。民族の持つ思想とは何か。戦争が始まったばかりであります。これは当然皇道主義、天皇を中心として国民が一致団結するという思想のもとで頑張れば大丈夫なのだと、この当時発言している。これは日本のリーダーの思想と全く同じだった訳です。

その後日本が戦争に負けた時に、この天皇中心の国体を反省するということになりましたが、その時に黒澤酉蔵翁はこのように言っています。「古い日本が滅びたのは、日本さえ良ければ他はどうでも良い、という誤れる道義に民族を駆りたて、神国、神の国日本という虚偽の道徳律を信奉し、実践したからに他ならない」これは間違いだったということで、黒澤酉蔵翁は、戦争中の思想は間違えた方向に誘導されたものであり、戦後それを修正するということでした。

民族を育む国土、これは日本という国は、他の国に比べると遥かに恵まれた自然豊かな優美な国土を持っている。この日本人の持っている思想と素晴らしい豊かな国土がある限りは、日本は永久に栄えるということを言っています。そのためには何が必要であるかが黒澤酉蔵翁が言わんとしていることです。健土、健康な国土を創ることを国策として、健全な食糧を自給する。食糧を自給するということを非常に強調しております。食糧を自給できない国はいずれ滅びる。日本は戦争に負けて経済復興しなければならない。そのためには貿易を盛んにしなければならない。貿易を盛んにするためには原料を輸入しなければならない。食糧を輸入していると、食糧の輸入に金がかかり過ぎて工業産業の発展を妨げる。ですから食糧の自給は国の根幹なんだということを言っています。

非常に面白いことを指摘しているのは、土地改良という言葉があります。土地改良というのは、一般の人は、土地条件を整えて収量を一割とか二割を増産する。そのために土地改良をすると思っているけれど、それは違うのではないだろうか。もっと本質的に国土づくりというものを念頭に置いて、ただ目先の

収量が増えたとか減ったとか、そういう事だけではだめですよ、と言っています。

国土保全という言葉も、荒れないように維持するという意味合いが強くて、積極性がない。前向きに国土を良くしていくという思想とは少し違うのではないかとも指摘しています。

私はここで非常に先見性があることをご紹介したいのですが、この食糧のない時代に黒澤先生は、ただ物の量が多ければいい、物を確保したからよいということではないのだ。食糧の質を考えなければだめだ。米にしても政府はただ量だけを確保するために死に物狂いになっている。だけどもそれは違うと。栄養分とか質とか、そういうものに着目した政策を展開していかなければだめだ。これは私も米の食管法の仕事をしましたけれど、戦争が終わって三〇年も四〇年も、米はどこで穫れても同じ値段。米の検査は形状検査で、品質と食味の検査ではありません、ということを長い期間やってきました。それを黒澤酉蔵翁は昭和一七年ごろに政策として間違いがあると指摘しております。

そして、健土、健康な国土を創ることを国策としなさいというのは、有畜農業、日本の農業政策は、穀物主体主義で、国土を良くするという政策とは程遠いものがある。家畜を飼うという農業に転換していかなければだめだ。そして何よりも健土を創るための基は農業だ。健康な農業を創るための農民の精神を大事にしなければだめだ。こういうことを言っています。

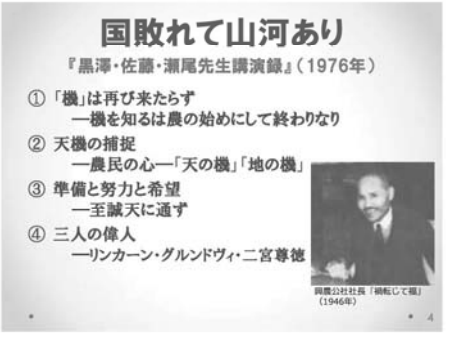
日本の農業はどうあるべきか、という論文があります。黒澤酉蔵翁は酪農義塾、酪農学園の職員なり、道の職員をデンマークに派遣して、勉強させるとともに、デンマークの農家を二戸、ドイツの農家を一戸、北海道に呼んで、これは自分のお金ではなく道庁のお金です。そういう仕掛けを知事に申し出て、デンマークの農業経営を家族ごと連れて来て、実演見本を示した。それぐらいやりましたが、自分はデンマークを見ていない。教員や指導員を派遣したけれど自分は行っていないので、戦後の第一番の仕事としてデンマークに約一ヵ月間滞在して隅々まで見た。その『農業国デンマーク』という視察記があります。酪農学園で復刻版を出しております。その中でデンマークという国の歴史を見れば、協同の精神、相互理解の精神と自助の精神。強い信仰心と農民教育の徹底。これが一時滅びかけたデンマークを復興させた基なのだということに、

改めて自分の足や目で確認した。デンマークには泥棒がいない。駅のホームにカメラを置いても誰も盗む人がいない。そういうことを体験してきているわけです。その締めくくりに、じゃあこれからの日本はどうすればいいのか、本の締めくくりのところに日本の農業はどうあるべきかという論文を整理してあります。

そのひとつは国家再建と食糧の独立。先ほども申し上げたように、食糧を独立させる、自給させることが国家再建の基なのだと。食糧の自前が出来ない国家はいずれ滅びるのだということを言っています。そのためには家畜を増産して政策転換しなきゃならない。国は、米・麦・豆類を中心とした振興策を作っている。だけど基本的にそれではだめで、家畜を媒体にして農政を展開するという方向にしなければならない。そして、この食糧難の戦中、戦後の混乱している最中に、国民の食生活の質の改善が必要だということを言っている。農業教育の歴史を調べている人の論文を見ると、世相の混迷している時代にも関わらず食生活の質的な改善が必要なんだということを提言しているのは、やはり黒澤酉蔵翁の先見性が並大抵のものではないということを指摘しています。

そして、家畜、なかでも条件に合わせた酪農の形態を導入していく。それは北海道も岩手県も本州も、それぞれの立地条件、どういう所にはどういう酪農が向くのだということをきめ細かく提言しております。そして何よりも農業教育の推進。農業教育、農業学校の教育は、本当の意味の農民を育てていないのだということを繰り返し、「農民に寄生するものを育てる教育はあるけれども、しかし農民を育てる教育は無い」、これは私が非常に気に入っている言葉で、東京農大の横井時敬も「農学栄えて農業滅ぶ」と、全く同じ哲学で農民教育にあたっているということがいえるのではなかろうかと思います。

これは概要のところで駆け足で話をしましたが、酪連という組合組織が公社になります。公社になるというのは、組合が発展的に解消して、北海道の乳業メーカー或いは道庁も一緒になって公社というものを創って発展していくわけですが、その時の社長が黒澤酉蔵翁で、ちょうど戦争に負けた時でした。その時に、二週間に渡って公社の社員を講堂に集めて十二日間連続講話をした講話録が残っております。その中の一つに『国敗れて山河あり』というタイトルのものがありまして、「機」と



いう字を説明しております。

これはどういうことかというと、酪農学園に機農高等学校というのがありました。戦前は野幌機農学校、戦後、学制の改革で野幌機農高等学校になりましたけれど、その時の機農という言葉は、機会の「機」に農業の「農」を付けて、機農学校という名前にした。文部省に出向き、私はこういう学校を創りたいということを、とくとくと弁舌さわやかに言ったところ、文部省の高官は非常に気に入って、「ぜひ、黒澤さんそれをやって下さい」ということで、申請からわずか一週間で機農学校の認可が下りました。こういう離れ業をやって、当然何の準備もないままに学校の認可が下りた。その時に黒澤酉蔵翁は、「野幌機農学校」という名前を付けました。文部省からは、「変な名前を付けなくても普通の農業高校でいいのじゃないですか」と何回も言われたそうですが、黒澤酉蔵翁は断固としてつらぬきました。

ところが生徒を送りこんでいる親たちは、機農というのは機械化、トラクターの機械の農業だと、だから近代機械の練習をして修得させてくれる学校だと思い違いをして、文句を言いに来たということが、笑い話として残っています。黒澤酉蔵翁は「トラクターの機械ではありません。チャンス・機微・タイミングを意味する。農業にはタイミングが必要である。機会を逃したらだめなんだということを教えたいのだ。これは何も農業ばかりではない。人生においても日々努力をしてチャンスを掴むということを心掛けることが大事なのだということを教えたいのだ」と言っておりまして、「天の機、地の機をうまく掴みなさい。チャンス、タイミングを掴むためには何が必要か。ぼんやりしていてはダメ。準備と努力とその上に希望を持って事にあたらなきゃ駄目なんだ」と。農業でいうなれば、種をまく時期、除草する時期、薬をかける時期、そのタイミングを逃してはならない。人生も農業と同じなのだということを言って、生徒に、何事にも周到な準備と周到な努力と、そして目的と希望を持って事にあたりなさいと教育しています。

黒澤酉蔵翁が尊敬する三人の偉人は、まずリンカーン、次にデンマーク復興の恩人というか、興国の父といわれている老牧師グルンドヴィの精神というのを学ばなくてはだめだ。そして、二宮尊徳は報徳思想を普及させた人ですが、黒澤酉蔵翁も報徳思想を北海道中に広げるという運動もやり、質素勤勉節約、倹約、誠実に人生を送りなさいとの教えを広め、北海道で酪連の報徳社の支部を作るなど、精神の涵養に努めたことが残っております。

黒澤酉蔵翁の頭にあるのは、北海道農業を冷害から救うことです。本州から移住してきた人たちが、土地の状況も考えない

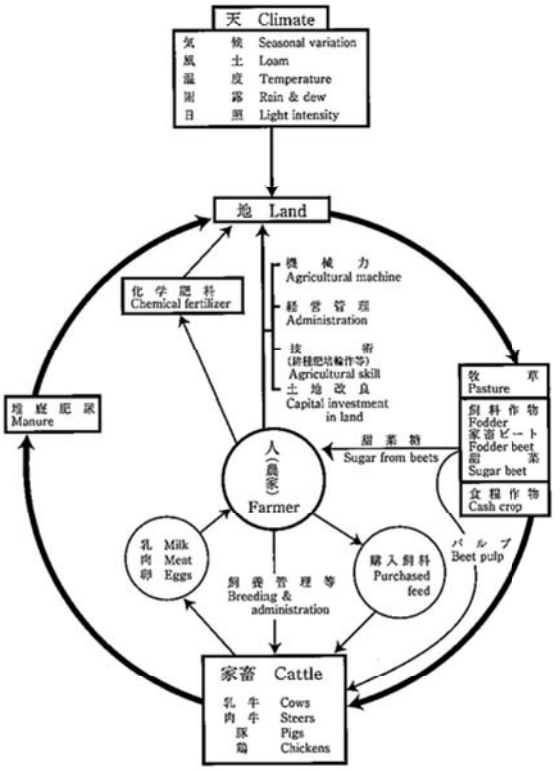
で本州のまねをする。或いは、米作りに憧れる。そういう農業ばかりやっているから北海道は冷害に悩まされている。この冷害を何としても食い止めなければならない。これが私の任務だということです。写真にもありますように、昭和四〇年前後に北海道が相次ぐ冷害に見舞われるわけです。その時に佐藤栄作総理大臣、松野頼三農林大臣が、北海道の冷害視察に来たわけです。それを聞き付けた黒澤酉蔵翁が、ちょっと待ってくれと、冷害にあった稲作地帯ばかりを見ないで、ぜひ酪農地帯を見てくれと、そして遠浅の酪農地帯に案内した。予定を変更して遠浅を見て下さい。昔は芋部落と言われて周りの農家から馬鹿にされた部落だった。だけども今は立派な酪農経営を実現させて、冷害のレの字もありません。これが北海道農業の在り方なんだということを、とくとくと説明して、水稲へ執着することへの猛反省を求めた。そして酪農を定着させることを言ったわけです。

適地適作という言葉も黒澤酉蔵翁が発案した言葉のようです。他の人はあまり使っていないようです。そして、適地適作と乳肉の生産。穀物にこだわり過ぎた農業ではだめだということです。北海道を日本の食糧基地にする取り組みが必要で、地帯別の農業地図を作れ。北海道のそれぞれの地域に合った営農類型を作って、それに合わせた政策誘導、地域農政を展開しなければならないということを提案しております。そして今までの国の農業政策は、平等の原則で、みんなに行き渡るような資金政策をやっていた。しかしそれは効果がない。本当にやる気のある経営者を捕まえて、それに重点的な資金対策を手当てすることが大事だと提言しております。

今日の主催者に胡麻をするわけではありませんけれど、地域農業研究所が発行している会報『地域と農業』第八七号に、今日で所長を退任される黒河所長が「これからの北海道における農業経営展開の方向について」という論文を書いています。その中に全く今の話と同じことを提案しています。規模拡大の方向も良いけれど、しかしそれだけではこれからの北海道農業はだめではないだろうか。地域の特性を十分に踏まえて、地域に合った経営モデルを多様なモデルを提示して、それを参考にして、個々の農家が経営改善に取り組むということが大事なのではないかと提言されております。私は青森県時代に同じことをやってきましたので、ただ読み過すのではなく、農協或いは市

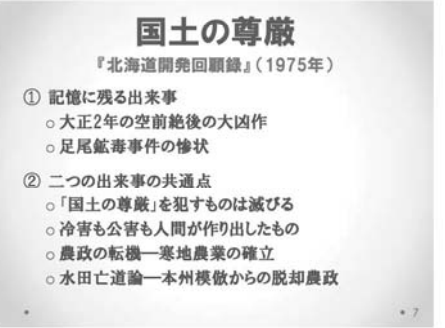
町村等が中心になって、北海道の地帯別にどういう農業に向かっていくべきなのかを、本気になって取り組むことが必要なのではないかと思っています。

黒澤酉蔵翁が繰り返して言っていることは、物事の根本、本質を知らなければだめだ。農業をやっている人も、農業の本来の使命、本来のあるべき姿を本当に理解してやっているかというと、疑わしい点がある。化学肥料万能の危険性なり、堆厩肥の大切さ、根釧原野や遠浅のような地帯への酪農導入。そして国が進めている全国画一・均一の農業政策から脱却しなければならないということを言っています。



黒澤酉蔵翁の持論で有名なのが、「農業の循環論」です。この農業循環図で何を言っているかというと、農業は、天・地・人の合作である。いちばん上に天、そして自然条件が大地に作用して、真ん中に書いてある人、農家が大地に働きかけて、牧草なり、主要作物なり、食料を生産して、そして人なり、家畜に与えて、その堆厩肥を、糞尿を大地に戻していく。こういうぐるぐる回るような農業でなければいずれ農業も国土も死んでいくのだということです。

ここで余談になりますけれど、面白いことがあります。シュガービート（甜菜）についてです。黒澤酉蔵翁は、甜菜というのは飼料作物の一種であり、本来飼料作物が主であるべきものが、北海道のビート生産農家は家畜を飼っていないといいました。つまりパルプを牛に与えて、その汁を甘味として砂糖工場に送ることにならなければならないのだけれど、甜菜を作る目的を間違えているのじゃないかと言っています。面白いことを言うと思いました。北海道の甜菜は牛を飼っている農家が作るのはわずかで、大部分は単に畑作物として作り、甘味汁だけを目的としているから、始終価格交渉をやっているし、収量は諸外国に比べてうんと低い。こういうところに農業の根本的な間違いがあると、こんなことを言っております。



画一農政からの脱却は、私も非常に気に入って、青森県時代に大変参考にさせてもらいました。全国一律の農政を批判して、北海道に酪農を振興させようとした時に、農林省、国の役人は北海道の実情を理解していないということをしきりに主張した人であります。

大正二年の冷害が自分にとっては大変な記憶として残っていると言っています。大正二年の大冷害の時に、自分は足尾銅山の事件と同じだと思い知らされたということです。水田亡道論。水田を重視した農業政策であれば、北海道は亡びるのだ。本州のものまねの農業はいずれ問題点にぶつかるのだということを言っています。

そこで、ここで申し上げたいのは、国土の尊厳についてです。大正二年の冷害と、足尾銅山の鉱毒の惨状には共通点がある。国土の尊厳を犯すものは必ず滅びる。冷害も公害も人間が作り出したものであり、農政の転換を、寒地農業を確立するという前提で、酪農を中心とした有畜、家畜を導入するという政策転換をしていかない限り、北海道の冷害は無くならないということであります。

酪農学園の教育に目を向けて、戦後さらにキリスト教農業大学を創ることまで取り組むのですが、なかなか認められない。何も設備がなくては大学の認可が下りないということで、その後、二転三転しながら今日ある酪農学園を創った。そして酪農学園に、文部省の許可も得ず三年制の季節性の短期大学を創り、一〇年近く経ってから文部省にばれるという騒ぎを起こしたことがあります。本当に農業をやれる人間を創るということに拘って、いろいろな試みをしたわけです。何としてもデンマークのような農業教育が出来ないかということで、あれもやりこれもやりするが、でもなかなか上手くいかない。そして三年制の短期大学を創って実践農民を育てた。ここからも優秀な人材が輩出されています。

黒澤酉蔵翁は、北海道の農業にとっての三劣悪土壌の改良というものに努力しました。酪農学園に大きな農場が三ヵ所あります。ひとつは重粘土の地帯、ひとつは泥炭地の地帯、ひとつ

は火山灰地の地帯に農場を持っています。そもそもその農場は、重粘土地帯と火山灰土と泥炭地の土地を酪農の堆厩肥によって改善して、立派な農地にしていくという目的で、実践・実験農場化した。それが、酪農学園が持っている農場の目的であります。今はそこまで取り組みはないですが。

時間が来てしまいましたが、これだけは説明したいと思います。健土、健民、健産ということです。私も学生にはこれを説明しています。個人レベルでの健康とは何かというと、第一には心の健康である。それから肉体の健康。財の健康、家庭経済の健康だと。心の健康と体の健康と家計の健康が揃って、初めて健全な社会人としての生活が出来る。これを国家に置き換えると、心は国民、肉体は国土、財は産業。順序は少し逆になっていますけれど、語呂を合わせる為に逆にしました、と黒澤酉蔵翁は言っております。そして健産、健康な産業のもとは農業である。ゆえにそれを担う農業人の育成が大切だ、よって以て酪農学園を創ったのだ。このような三段論法になるわけでございます。

ご存じの方が多いと思いますが、石黒忠篤という、戦前・戦後の日本の農政を指揮した農政の神様といわれている人がいます。黒澤酉蔵翁が農林委員会で演説している時の、政府側の実務立役者であります。石黒忠篤は農思想論の中こういうことを残してあります。

「国家の基たらざる農業は一顧の価値もない」とする強い農本思想の持主で、「食糧は国家独立の基礎条件である。それは戦争をするためではない。中立を厳守し、平和を守るためにも食糧の自給なくしてはこれを貫き通すことはできない。食糧が十分なことは一家にとっても一国にとっても独立と平和の基礎である。いや実に世界平和の根本条件であると私は確信する」このように石黒忠篤は言っています。そして石黒忠篤のゴールは、やはり健全な精神を持った実践農民の育成でありました。最初に申し上げた農民道場を全国に設置させたのも石黒忠篤であります。

黒澤酉蔵翁の前後にこういう人もいて、黒澤酉蔵翁の思想と合致する中で、戦前・戦中・戦後の混乱を乗り越えて、今日に至っているということを、参考までにご紹介しました。

あちこち中身を説明しようと思って準備をしてきましたが、与えられた時間がここまでしたので、ぜひ持ち帰って頂いて、

お読み頂き、さらに黒澤酉蔵翁の訓をそれぞれの胸に刻んでいただければと願います。ご清聴ありがとうございました。

＊　＊　＊　＊　＊

黒　河　先生、どうもありがとうございました。最初にご紹介しましたが、先生が青森県庁に在職されていたときに、多大な成果を上げられたとご紹介しましたけれど、まさしく青森県庁の農林行政において、先生は全国画一的な農林行政はおかしい。地域振興はそれぞれの地域・地帯に応じた政策展開をしなきゃいけない。適地適作を実践して多大な成果を上げたと聞いております。先生、ありがとうございました。

それでは次に、ただ今のご講演に関わるコメンテーターをお願いしております、太田原先生にご登壇お願いします。

現在政府はＴＰＰ交渉成立の前提として、農協改革を画策、断行しようとしていますが、太田原先生におかれましては、この間、農協の果たす役割の重要性について、全国を回っておられます。昨日は衆議院の農林水産委員会に、参考人として呼ばれ、陳述をされております。大変お疲れのところ、昨晩遅くに戻り駆けつけていただいています。

先生は実にたくさんの著作をされております。私の勝手な判断で、その中でも私が一番感心し、一番熱心に読ませて頂いた、平成四年出版の『北海道農業の思想像』という本がございます。主にこれは、水田地帯と畑作地帯に焦点を当てたものでございますけれど、北海道の農民のエネルギーが、開拓以来の北海道の農村社会、或いは農協組織を形作って来たというような事を論じたものであり、まさしく太田原先生の理念の根源を象徴しているような本であると私は思っております。

今日の黒澤酉蔵翁のお話は、主として酪農でありましたので、北海道の思想像として水田・畑作だけではなく、酪農についての思想像の形についてもコメントして頂ければと思っております。先生どうぞよろしくお願い致します。

コメント

一般社団法人北海道地域農業研究所　顧問
北海道大学名誉教授　太田原　高昭

仙北先生、貴重なお話大変ありがとうございました。この貴重な話に、私がコメンテーターとして適任かどうかあまり自信がありません。昔、酪農学園大学に大高全洋先生という方がおられまして、覚えている方はもうだいぶ年配になられたかと思います。この方の博士論文が「酪連史の研究」でした。私は大学院で二年下だったものですから、この「酪連史」と黒澤酉蔵翁の話というのは、学生時代から大高先生を通じて聞かせてもらっておりましたので、今日は大変懐かしく思いました。その前にこの本を頂いて、一生懸命読みました。仙北先生がおっしゃるように、いろいろな意味で今の日本、今の北海道にとって、とても大事な本が出来たなと思っております。

この黒澤酉蔵翁の一つ一つの業績・お考えには、適切な解説がされておりますので、私はそれを繰り返すことではなく、やはり黒澤酉蔵翁とは大変な巨人であったことを改めて感じさせていただいたことを、申し上げたいと思います。もう一度足跡を改めて見てみますと、教育活動・産業活動・政治活動・北海道開発、これは行政活動と言ってもいいかもしれません。黒澤酉蔵翁はこういう一つの理念を貫き通すために、あらゆる面、教育の面、産業活動の面、政治の面、北海道開発という行政の面から全力を挙げて取り組まれた。それぞれの分野で立派な人はおられますけれども、このようにあらゆる分野に一身で取り組まれたという方は、全国的に見てもちょっといないんじゃないでしょうか。改めて、そういう意味で黒澤酉蔵翁という人物に今の時点で我々が注目する価値があるのではないか。その黒澤酉蔵翁の理念は、酪農というところに象徴されております。

酪農は、いろいろある農業の一つの部門ではなく、全体を貫く土台、基軸、一つの農業理念を伴った表象として言われている。従って、今日は酪農学園の関係者がいらっしゃると思いますが、単に酪農部門のことを学ぶということではなく、農業の基盤・機軸を学ぶ。農業だけではないかもしれません。国土の基盤・機軸を学ぶ。それも、遠くは足尾銅山の国土が汚染されるというところにあります。また、デンマークの国造り。これは内村鑑三が書いていますが、やせ細った半島に閉じこめられ

たデンマーク人が、いかにして自分たちの国土を作り、今の豊かな国民経済を築き上げたかということに繋がる酪農を学んでいる。そのことを改めて思い返すことができる話だったのではないかと思います。

今日は麻田理事長がいらっしゃいますけれど、酪農学園という名前は簡単に変えてはいけないと思います。それと、仙北さんの青森で実践された、画一的な官僚的農政からの脱却。その地域地域に深く根ざした行政の在り方があるじゃないか。やはりそういうことについても、この黒澤酉蔵翁がいち早く展開しておられる。

その支えになる地域立法は意外にないのです。日本では一つの法律が出来ると、それは全体の地域にいろいろアレンジを加えながら適応するものであると。北海道独自の立法というようなものも昔はあったのですが、一番最後にあったのは、マル寒法です。それ以来、北海道を対象とした、そういう法律は作られていない。あの頃は北海道だけじゃなくて、積雪寒冷地立法、西南暖地に向けた立法とか、地域立法がけっこうありました。そういう所に、この黒澤酉蔵翁は、政治家として非常に関わっておられた。この本を読んで、特に北海道開発審議会会長を八期一六年も続けられた。そういう中で北海道独特の立法が必要だとなり、マル寒法ということに今結実したのだと思います。

そして地域立法を作るということは、当時大変なことだったらしく、「それではその根拠を明らかにせよ。北海道が府県と異なる特別の立法を必要とする、歴史的・技術的根拠を明らかにせよ」ということで作られたのが、かつての北海道立総合経済研究所から出た『北海道農業発達史』です。

私たちはその精神を引き継いで、地域農業研究所で、一昨年、『新北海道農業発達史』を出したばかりでありまして、そういうこともこの黒澤酉蔵翁の思想・実践と結びついているのかなと、感慨が湧いてくる訳であります。

この数年で、『新北海道農業発達史』や、ここにいらっしゃる冨田さんが大変ご苦労された『北の大地に挑む農業教育の軌跡』が北農会から出まして、続けざまに北海道農業の原点とか、理念に関わる本が出されております。これは大変大事なことであって、今日本の農業や農政が、風に揺らぐ葦みたいになっている中で、北海道については、これだけの理念・理想・思想的基盤があるんだということを確認するために、特に若い人たちには、取り組んで頂きたい。研究者だけではなく、各農業団体の方、行政の方もです。改めて北海道農業の、よって来たる思想的基盤、そういうところに思いをいたしていただければなと思っております。

私は黒澤酉蔵翁の赫々たる足跡の中で、政治家として日本協

同党を創ったところに関心を持ちまして、調べてみました。一九四五年に、日本協同党を結成して代表世話人になるのですが、すぐその翌年に公職追放になっています。しかしこの協同党というのはその後大変発展して、その次の次の年くらいですか、国民協同党と名前を変え、何と衆議院で七八名という勢力を持っていました。今、衆議院で持っている民主党の議席が七三議席ですから、これは大変な勢力を持っていた。片山内閣の与党として、政権にも参加しております。後に総理大臣になる三木武夫がまだ若い頃ですけれど、大臣として片山内閣に参加していたという歴史があります。

協同組合ということに関連している我々としては、日本協同党、日本国民協同党のあゆみを、きちんと調べてみたいと思っております。おそらく戦後、昭和二二年ですから、この頃に農協法が出来るわけです。農協法だけではなくて、漁協法とか、生協法とか、中小企業協同組合法とか、信用組合法とか、あらゆるところに協同組合が創られています。そのための立法がなされるわけです。

これは一つの大転換といいますか、要するに、資本主義経済は、放っておけば大が小を食って、大きいものだけがひとり勝ちをする。協同組合は、そうであってはいけない。小さいものが集まって、大の経済と対抗していく。そういうことがあって初めて奥深い豊かな国民経済が作られる。これはヨーロッパの伝統的な経済民主主義、産業民主主義といわれる考え方です。それを具現するのが協同組合であります。その考え方を戦後、日本において、徹底的に主張して実現させたのが、この協同党ではないかというように思っております。この辺は非常に面白い研究課題になると思います。

それから七〇年、農協法改革という「協同なき農協論義」なるものが蔓延しておりまして、農協は協同組合なんだけれど、なかよしクラブで、競争がなくて、そんなことをやっているから進歩に取り残されるばかりだ。これをビジネス化せよ、株式会社にせよということがまかり通っています。もう一度、なぜ黒澤酉蔵翁が同志と共に日本協同党を創ったのかということに思いを馳せてみたいと思います。

たぶん北海道はこういう先人がいたために、内地府県の農協に比べれば、最も農協らしい農協だといわれる事業を誇るようになった。漁協もそうです。北海道の漁協は日本最強の漁協といわれています。生協もそうです。生協も神戸、横浜、札幌というのが、日本の三大生協と言われました。最近、神戸を抜き、日本一の生協か、それに迫っている。言う人に言わせれば北海道は協同組合王国北海道というようになって来ています。

それはたまたまではなくて、やはり黒澤酉蔵翁に象徴され、

小林篤一とか、いろいろな方の名前が挙がって参りますけれども、そういう先人の意思を引き継いで、今現在の我々があるというところに確信を持つ必要があるのじゃないでしょうか。

昨日、私は衆議院の農林水産委員会で参考人に呼ばれまして、陳述をしてまいりました。その報告を少しせよと、所長に言われております。「衆議院農林委員会で政府に迫る黒澤酉蔵翁」という写真がありましたけれど、あの迫力には全然及びませんが、今日の農業新聞に私の写真が載っております。最初に一五分意見を陳述して、その後先生方からの質問に答えるのが役目であり、せっかく呼ばれたのだからと、言いたいことを言って来ました。最後に「この法律に対する意見はどうだ」と聞かれ「廃案が適当だと存じます」と言ってまいりました。

ちょっと意外だったのですが、終わってから、与党・野党の先生方がたくさん来てくれまして、自民党の先生方も「よく言ってくれた」そういう雰囲気なんです。江藤さんという自民党の方が委員長ですが、規制改革会議に負けないでがんばりますというようなことをおっしゃるので、やはり与党でも農林水産部会の先生方は、随分雰囲気が違うなと思って、かなり心強く思いました。官邸が睨んでいる中でやっているわけですから、どういうことになるのか。

質疑応答の中で気が付いたことですが、委員の質問の中に、私に言わせれば突拍子もない「これから農協は必要でしょうか」「食料が足りない時の農協と、食料が余っている時の農協とでは、違うんじゃないかと聞いていますが、どうなんですか」とか、そういう質問が結構多いのです。どういうことか考えてみたら、どうも農水省がそう説明をしているらしいのです。言っていることは、どうも食管制度との関係です。農水省にとっての農協とは、食管制度があるうちは、どうしても必要だったのです。いわゆる農政の下請け機関として農協がないとどうにもならない。しかしその食管制度が無くなった。けれども、減反が続いている。減反は最後は集落でまとめるしかないのですから、農協にやってもらわないと、行政じゃ絶対出来ない。農協は農水省にとって必要だった。しかし、減反もやめる。そうしたら農協は要らない。どうもそういう問題意識が農水省の中にあるようです。

これは協同も何もなくて、役所が下請け機関として使えるうちは使い、要らなくなったら使い捨てをするということでありまして、実にけしからんと思うのです。今回の農協改革の中には、財界からの要請とともに、農水省の見解が入っているということは、確かであります。それに対して、協同組合、農協は、農水省が必要としようがしまいが、協同販売、協同購入から始まって、協同組合としてやらなければいけない仕事は、しっか

りあるわけであります。それは、これからますます必要になるのですが、そういう問題状況の中にいます。

北海道にいる我々は何を言っているのだとなるわけですが、協同と、農業の理念が怪しいところでは、いよいよ農協も終りなのかという動揺が走るということもあるようです。

農業の理念、協同の理念を打ち出した黒澤酉蔵翁の思想に触れるということが益々大事だと思いながら東京から帰って参りました。

こういう本をまとめていただいた仙北先生に改めて感謝して、コメントを終わりたいと思います。先生どうもありがとうございました。

質疑応答

黒　河　　どうもありがとうございます。仙北先生、太田原先生のお二人から貴重なご教示を頂きました。これからご参会の皆さまの方からご意見ご質問を頂戴したいと思います。

白　坂　　私は酪農学園大学の酪農学科一六期卒業の白坂と申します。勤務先は、北海道酪農検定検査協会に勤めております。私も牛乳・乳製品の製造の方の研究をさせていただいて、学生時代にスイスに行き、山岳酪農とこれからのチーズが日本人の将来に向けてどうなるかという構想を持ちました。一九歳の時でした。帰国後、酪農家が手作りでチーズを作ることが北海道に広がったらどうなんだろうと研究室をノックしました。

私は酪農学園大学の黒澤酉蔵翁の思想に自分なりに影響を受けたかなと思っています。そこで、酪農の専門大学として、日本でひとつしかない酪農学園大学の使命、黒澤酉蔵翁が目指した大学、農民義塾としての使命といったものが間違いなく後世に引き継がれていく態勢で動いているのかをお聞きします。

仙　北　　今日は酪農学園の理事長が来ていますので、理事長からコメントをお願いします。

麻　田　　私から答えるよりも、本当は仙北さんの方が良いのではないかと思いますが、私が酪農学園の理事長になって九年目に入ります。酪農学園に就任した時に一番感じたのは、酪農

学園は酪農だけの大学ではないということです。食、農業、環境、獣医、生命科学と本当に幅広く、全国から学生が来ているということです。

これから少子化の中で、全国の私立大学、特に地方の私立大学は大変な時代に入ってきました。そういう中で、酪農学園大学は、どうなって行くのか。大学に魅力があって、みなさんに来てもらえる大学。そこを卒業した人間が、日本の中で本当に必要とされ、社会で活躍できる大学になることが大切です。

そういう中で、黒澤酉蔵翁がいろいろ考え、いろいろなことを残しております。協同の話も、健土健民も、非常に大事なことだと思っております。或いは北海道を東洋のデンマークへという大きな理想を持っていろいろなことをされた。今、北大などは必死になって自校教育をやり始めています。酪農学園大学でも自校教育で、入って来た学生に、黒澤酉蔵翁が何を目指し、どんな社会を目指していたのかを学んでもらうことが非常に大切だと思っております。建学原論というカリキュラムを必修で、一年生からきちっとやる。黒澤翁の生い立ちや、先ほどの教育、産業活動、政治活動など全て学ぶ。そういうところをきちんと学ぶ。もうひとつは、圃場、畜舎の整備です。酪農だけじゃなく、肉牛の農場も畜舎も作り、豚から鶏から昨年度で整備が終わりました。作物関係も整備が終わりました。かつては酪農学園大学には、酪農の農場しかありませんでしたが、今はそういう形になっております。一年生は、環境を学ぶ者も、獣医を学ぶ者も、或いは獣医保健看護を学ぶ者も、循環農学の者も、全員がそこで畑を耕し土に触れ、そして作物を育てる。或いは家畜に触れる。先ほど農業が産業の土台と申しました。この社会の土台です。或いは大地、土地は、この社会の土台だということを肌で感じて、自分たちがこれから大学でどう学んで社会に出るか、自分がどう生きて行くかを、自分自身で学んでいける環境づくりをしています。

黒澤記念講堂の前に、黒澤酉蔵翁の銅像が立っています。北を向いて上を指差しています。私は北極星を指しているのではないかと思っているのですが、卒業した学生は、あの銅像をクラークさんの銅像だというのです。大学の卒業生がです。私はがっかりしまして、これじゃあまずいなと思い、その後の改組でカリキュラムからやりました。当時の谷山学長といろいろ話をしながら、建学原論を作り、やるようになりました。実習と

して、圃場に必ず出る、農場に出る。自から学べる状況を作っています。

そういう形で、学生たちの精神に響く取り組みを行っています。私は農本主義者の典型的なものですから。一方で大学ではないですが、とわの森三愛高校では、農業科もあったのですが、普通科では今までは全く触れていませんでしたが、いろいろ話をする中で、農作業、作物を育てるアグリトライという選択科目を用いました。そうすると、やりたい子がたくさん増えまして、大変効果が高かったと思いますし、通信制というのも創りました。通信制は学びたいけれど不登校の子だとか、あるいは道立高校へ行けない子がきます。その子たちが、通学コースは週三日なんですが、そこでも週に一日授業の中で圃場に出ていろいろな農作業をしたり、採れた物を販売したり、それを料理したりします。学校へ行きたいけれど行けなかった子が、この高校では来るのが楽しくなるそうです。三月に五回目の卒業式をやりました。毎回卒業をする生徒に、本当にここへ来て良かったと言われます。いつも楽しくて楽しくてしょうがなかった。そして本当にいろいろなことを話せる友達も出来たと言う。何がきっかけかというと、圃場に出て一緒に作業するということです。人間力というのでしょうか、そういうものを身に付けているのを見ますと、ああこれが酪農学園の創立者の黒澤酉蔵翁の思いであり、土というものに触れ、その中で人間が本当に健全な精神を得、そういう人が育っていくのだなと思っております。答えになったかわかりませんが、そんなことに取り組んでおります。

ついでにお話させてもらいますと、私はコープさっぽろの常任議長でもありますが、協同組合というのは、益々私は大切だと思っています。新自由主義でどんどん競争、競争と突き進むと、必ずひずみが生れます。もう入口まで来ているのではないかと思います。そういう中で、私は黒澤先生の思想、黒澤先生がいろいろやってきたことは、何も自分のためでも何でもないのです。黒澤先生は自分でも酪農で大きな牛を二〇頭も搾ってやっていたわけです。それを自分で売っていたわけです。本来は他の酪農家がどうなろうと関係ないわけです。ところが加工向けに売っていた人たちが買われなくなると、黒澤先生は、それは大変だということで、協同組合、酪連を創った。私心が全く無く、北海道のことを真剣に考えていました。未来の北海道では、高級食料供給基地であるとか、北海道の四季の特色を生かして、国際的な一大観光基地になるということを北海道一〇〇年の時に言っています。

もうひとつは、ソ連の時代にシベリアに向かって北海道が工業の進出基地になると言っています。私はその先見性はものす

ごいと思いました。北海道百年の時に、一〇〇年で北海道の人口は五〇〇万人になった。これからの一〇〇年で一、〇〇〇万になることも夢ではないのだと。高級食料の供給基地と、世界の国際一大観光基地と言っていましたが、今本当に海外からの観光客が来るようになっています。それを今から四〇数年前に言っていたということは、大変先見性があったと思っています。そのことを、みなさんにご紹介させて頂きました。どうもありがとうございました。

黒　河　　それでは、もうあとお一方。

松　中　　ホクレンにいます松中といいます。仙北先生、今日はありがとうございます。ご承知のように、ＴＰＰで日本の農業はすごく困った状態に立っているわけですけれど、私たち、黒澤先生の教えを受けた者は、食料の自給は国の独立であるということをしっかり学んできました。今の状況を黒澤先生がもしご覧になったとしたら、どういうようにおっしゃるかなということを、ぜひ仙北先生からお聞きしたい。これを聞いて帰らないことには今日来た意味がないと思っておりまして、ぜひお願い致します。

仙　北　　また、難しい質問ですね。この本の中にも黒澤先生が書いていますけれど、心を忘れた経済政策に永遠性はないということを言っています。これは非常に感動深い言葉で、心を失った経済政策に永遠性はない。松中さんご指摘の食料問題は、ただ競争原理でやればいいとか、輸入・輸出戦略で生き延びるとか、そういう話ではなく、やはり農業の持っている本質の使命、さっき理事長も話をしましたけれど、国土を守るために農業があるんだという原点を忘れて、ただ安いものを輸入する、高いものを作って売る。攻めの農政だ。これが経済原則で、農家はそれに勝っていけばいいのだというような政策は、農業政策ではないのではないかというのが、私の昔からの考え方です。

松　中　　どうもありがとうございます。

黒　河　　この辺で質問を打ち切らせて頂きたいと思います。仙北先生、太田原先生、ありがとうございました。